

ニンジンの栽培法

2011/10/14

※一部又は全部の引用を禁止いたします

タネまき

ニンジン排水性と保水性がよく、どの土地でも結構うまく育ち、生育適温は平均気温15～23℃で春や秋のおだやかな気候での栽培が最適であるが、かなりの低温にも耐え、高温にも比較的強い性質をもっていて作りやすい根菜である。ただし、グリーンプラント型のバーナリを示すので、晩秋～早春は晩抽系のトウ立ちしにくい品種を用いること。

また、盛夏期はニンジンにもっとも適した播種期であるが、生育日数がダイコンなどの約倍かかることを考慮し、8/下～9月上旬(九州)までに播種を終えること。

うね巾50cmに2条のすじまきとするが、一般に発芽率が他の作物にくらべて低いのでややたくさん種子を蒔くようにする。ニンジン好光性を示すので、多めの覆土は避けたほうが良いが、発芽日数が長く(※注1)、その間乾燥しないように注意す

る必要がある。覆土が厚いほうが乾燥しないので、明らかに矛盾である。この矛盾を解決することがニンジン発芽させるポイントといえよう。播種前に十分灌水するか降雨を待ち、蒔き溝の下に十分水分がある状態で、スジ状に種を蒔く。その後種子が見えるくらいの薄い覆土をし(もしくは覆土をせず)、鍬などを使って十分押さえつけておく。その後、乾燥を防ぐ目的でモミガラ、切りワラなどの軽い被覆を行う。

※注1:ダイコンが2～3日で発芽するのに対し、ニンジンは3、4倍の7～10日以上要する。

施肥

ニンジンは酸性土壌をきらうので石灰で中和する。有機質を好み、生育後半は特に肥料分を多く必要とするが、前半は元肥量が多すぎると(特に窒素分が)、根割れの原因となるので注意が必要である。有機質に関しては他の根菜類と同じで、

可能な限り日数を経た完熟堆肥を用いるようにし、(それができないようであれば、一作前に堆肥を与えておく配慮が重要)保肥力のある土壌では緩効性の元肥主体とし不足を追肥で補うようにする。一方、赤土など保肥力の弱い土壌では元肥は窒素を控え、追肥主体の肥料設計をするほうが良い結果が出る。成分量で各10～15g/m²程度。

間引き

発芽後こみ合っているところを数回に分けて順次間引き、最終株間を8(～12)cmにする。

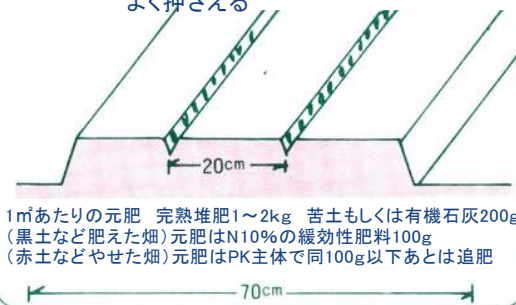
収穫

五寸系で100～120日で収穫となるが太いものから順次間引収穫するとよい。前項と関連するが、長期収穫なら5cm程度に最終間引きし、抜き取り収穫しながら順次株間を広げていけばよい。

日本種苗協会長崎県支部/市川種苗店

1 タネまき

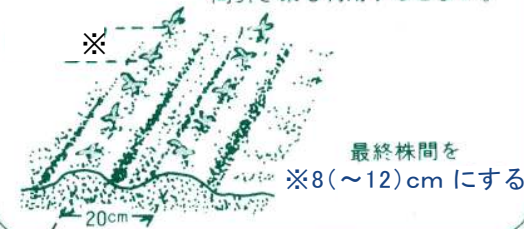
種はスジに、やや多めに蒔く、土は種が見えるくらいに薄くかけよく押さえる



1㎡あたりの元肥 完熟堆肥1～2kg 苦土もしくは有機石灰200g (黒土など肥えた畑)元肥はN10%の緩効性肥料100g (赤土などやせた畑)元肥はPK主体で同100g以下あとは追肥

2 間引き

- 1回めは本葉1枚のとき。
 - 2回めは本葉3～4枚のとき。
 - 3回めは本葉6～8枚のとき。
- 間引き菜も利用するとよい。



最終株間を
※8(～12)cmにする

3 土寄せ

首部の裂皮を防ぎ、色上りをよくするために、肥大にともなって土寄せする。

